
空模様

楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空模様

【Nコード】

N0426B

【作者名】

楓

【あらすじ】

男が付き合っていく中で少しずつその女の人に恋をしていくが一言でフラれてしまい自分をみつめなおしていくという話です。

例えば水の循環の話。

地上の水が水蒸気になり…雲になって雨となり、地上に落ちる。
そしてまた水蒸気になって蒸発する…。

人間も同じだ。

天から地上に降りて、役目を終えたらまた天へと還って逝き、
そしてまた鶴が運ぶ新たな命がこの世に授かる。

そんなメカニズムはずっと崩れない。

永遠にずっとくりかえされるのであろう……俺の恋には…終わりが
あるのに…

君に出会った頃はまだ空の青さを知ったら、心が広くなった気がした。

ある日の放課後。俺は掃除当番で窓ふきをしているところだった。

「牧野くん。今日掃除当番なの？」

背後から声をかけられた。びっくりした。後ろにはくるくると髪を
巻いた“女”が立っていた。

「あ…ああ。」

「…ひとり？他の当番の人は？ゴミ捨てでも行ったの？」

他の人…ほんとだ…もう誰もいない。俺をおいてサボったのか。。

「…さあ。知らない。」

「手伝おうか？」

くるくる巻いた髪があけた窓から入ってくる風になびく。

こんな大人びた人もいたのか…でも何故俺なんかに話かけてくるのか…そんな疑問を持ちながら会話を続けた。

「いや、もう終わるから。大丈夫ですけど。」

窓をふきながら答える。あとふいていない窓は二ヶ所だけだった。

「…それなら待ってるよ。一緒に帰ろう。」

その女は鞆の中から本を出しよみはじめた。

何故俺を待つのか。

君はこの頃からマイペースだったのかもしれない。

俺が窓ふきを終わっても、全く気付かないですつと本を読んでいた。本を読み終わって、待たせていたことを謝りもせずに、この本のいいところを話はじめた。

…やはりマイペースだ。

そのときはあまり気にならなかった。そして、帰りみち俺はその女と付き合うことになった。

満天の星空の下…ただただ、君が来るのをずっと待っていた。

時計台の下、午後二時。

君がそう言ったはずなのに、君は、いつも俺を何時間も待たせた。月がでてきたところに君は現れた。

でも、俺は怒らなかった。君を待つのが好きだった。その待っている時間が愛を深めているようにさえ感じていた。

君が走ってきてくれるだけで待つていた時間など忘れてしまった。

「牧野くん、ごめん。あの、ごめん」
「いいよ。俺は大丈夫だから。」

月日が流れるのは早く。付き合うことになってから半年が過ぎた。彼女のルーズな所は弱まるどころか、じょじょに増していった。

それでも俺は君と一緒に木の芽が少しずつ伸びる過程を…
蝶がサナギから羽化する過程を… 日常的にありそうなことを…
君と一緒に何をするでもなく純粹に、手を放さずに隣でずっと歩きながら見ていたかった。

だが君が俺に別れを告げる。
理由は特に無い。

ただ、疲れた。と。
疲れた…

都合のいい言葉。彼女が去ったあともずっと彼女の後ろ姿を追いつけるように視線は外さない… 外れない…

モノクロが広がる僕の世界のたったひとつのピンクの淡い花は枯れて、いくら水をかけても再び花をつけることはない。そんなイメージで、彼女との未来ははじけたが、黒に染まる俺をつつんでくれる、いつも変わらぬ太陽の光だけがせめてもの救いだった。

俺はこの時はじめて声をだして感情を何にぶつけることも出来ず、かなしくて泣いた。

彼女があまりにも愛しくて泣いた。
だからか、ヒマワリの気持ちかわかる気がする。絶対に裏切らない太陽の下ですつと背伸びして。追いつけて。太陽が少しでもこっちを見てくれるのではないかと期待して… 綺麗な花を咲かせて…

俺は何を信じてきたんだろう。

ただピンクの淡い花を守るだけの人生で終りを告げるつもりだったのか…

それが本当の役目だったのか…

そう思ったら、なんだか黒に染まった自分の世界も悪く無いように感じた。

この闇を切り裂けるのはただひとり自分という名の個体。

前に進むのは足という名の自分の一部である。

ただひたすらガムシヤラにもがいて、ぬけだすしか方法はない。

ぬけだして光をみつけて手をのばしてつかみとる。

君がまた俺に笑いかけてきてくれるように、今は自分を磨くしかない。

待っていても何もはじまらない。

前進して君に近付くことが出来たら。。彼女のうるんだ瞳の中に俺が映るように。。

あの空が昔のように独りでみても青に感じて、暗闇の中に自分の生きた証を咲かせられたら…太陽に胸をはって君に

「好き」

と伝えたい。粉碎してもいい。今度は俺が彼女を振り向かせてみせる。自分の力で羽ばたいて彼女を幸せにしたい。。。

だからもう少し…

ピンクの淡い花でいてください。

赤に染めるのは俺だけでありたいから。

たくさん木の中に君だけの楽園をつくりあげたいから。

「なんで私のこと避けるの？別れたから？あんな別れ方したから。」

「…」

答えられなかった。避けてるつもりはなかった。でも、俺は、まだあなたにふさわしい人間になってないから。自分のことで精一杯だから…もう少し待ってほしい。そんなこと言えるわけがないじゃないか。彼女が好きかも解らないのに。

「言ってくれなきゃ解らない。」

「…そうじゃない。別れ方がどうかで避けてるんじゃない。…いや、避けてるつもりもない。」

俺の戸惑いは隠せなかった。

「それなら、どうして？前みたいに話してくれないの？私は話をしたい。」

「…ああ。」

「私はあなたが今も好きよ。でもあなたは私に本当の自分を出してくれない。デートに遅刻したのだって怒って欲しかった。もつと感情を出して欲しかった。いつもどこか違う所を見てる様だった。」

「…そんなこと」

「そんなことなの？…そうわかった。あなたにとって私はそんな人なのね」

「…そ…それは…」

違う。違うんだ。俺は君が好きなんだ。

言葉につまる自分に嫌気がさす。気持ちを言葉にしなければ…

「…ごめんね。自分勝手にごめん…」

そして彼女からはもう俺に話かけなくなった。

話をしなくなつて日がたち、俺は背がのびた。少しだが考え方も変わってきた。まだ答えははっきりしていない。しかし、彼女への思いは誰にも負けない自信があった。

ある日の放課後。

掃除当番がまわってきた。また、みんなサボっている。ふりかえっても誰もいない。静かな教室。

ガラガラ…

誰かが入ってきた。

くると巻いた髪がすこし乱れている。

「やrinaおそう」

そうはじめに言葉にしたのは“俺”だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0426b/>

空模様

2011年4月14日11時45分発行